

研究課題	日本語指導における ICT を活用した日本語指導担当教員・学級担任・地域の大学との連携
副題	～外国人児童の学習意欲向上のために～
キーワード	
学校/団体名	長浜市立長浜北小学校
所在地	〒526-0021 滋賀県長浜市八幡中山町1310
ホームページ	http:// www.nagahamakita-es.nagahama.ed.jp/

1. 研究の背景

本校に在籍する児童の数は現在818人であり、そのうち外国人児童の占める数は91人と全校児童の約一割を超えるほどである。幼少期より日本に移住したり、日本で生まれ育ったりした外国人児童もいれば、母国の学校に就学中に、親の都合で日本に移住してきた者も多い。特に後者にいたっては日本語の基礎はおろか日本での生活習慣がほとんどないため、一から日本語を学んでいかななくてはならず、通常学級の教育課程で学んでいくことが困難である。また、家庭だけでは慣れない日本の生活に適応することにも時間がかかるため、日本の文化、習慣への適応の面にも支援が必要である。そのため、本校では日本語教室(スマイル学級)を常設し、各学級の国語科の時間に外国人児童の取り出しをおこない、個別、または少人数制の学習スタイルを通して日本での学校生活や社会生活を送るための学習から進めている。しかし、日本語教室を担当する教員も、外国人児童に向けた日本語指導の専門というわけでないため、効果的な指導方法がどのようなものか日々模索しているところではある。加えて外国人児童の日本語能力や学習意欲の向上についても把握できず、成長を実感しにくいというのが現状である。

2. 研究の目的

本校では、年々外国人児童の在籍が増え続けている。2011年から2019年の推移は以下の通りある。

	H23年	H24年	H25年	H26年	H27年	H28年	H29年	H30年	令和元年
人数(人)	42	48	45	45	52	57	75	86	93
割合					6.6%		9%		11.4%

現在はポルトガル語の児童50名、スペイン語の児童が41名、中国語の児童が2名の計93名が本校に在籍しており、年々増加の傾向にある。

このように増え続ける外国人児童の学習支援として、本校では日本語教室を設置している。本校の日本語教室のねらいは、日本語能力が不十分であり学級での一斉指導での学習が困難であると思われる児童の取り出し指導をおこない、その児童を、少人数または個別の指導によって、日本語能力の向上を図り、やがては学級での一斉指導の授業に対応できるようになったり、学級の日本人の友達と良い関係をつくったりさせて、充実した学校生活を送れるように育成することである。しかし、現状は、増え続ける外国人児童に対する学校体制が追い付いていないというのが実態であり、教師が意図するように学力を伸ばすことができず、低学力の外国人児

童が多くなっている。教師や友だちの話していることもわからず、ひらがなやカタカナを覚えて書くのがやつのため、周りの日本人児童との学力格差も広がり、意欲的に学習に取り組めなくなっている。また、外国人児童の中には、学校生活にうまく馴染むことができず、生徒指導面や生活指導面でも課題のある児童も少なくない。学習規律が身につかない外国人児童の指導の困難さを、各担任も日々感じている。

そこで、外国人児童が意欲を持って学習に取り組んでいく方法として、ICT 機器を学習の場に導入していくことを取り入れた。日本語での言葉や文ではわからないことも、ICT 機器を利用することで、母語に翻訳して伝えたり、インターネットの動画や画像を使って児童の知らないことを具体的に見せることができたりすれば、児童の興味関心が高まり、学習意欲の向上へとつながっていくであろう。外国人児童にも言語の壁を感じさせない学習指導や方法、内容を取り入れることで、児童の興味を引くことができ、学習意欲が向上し、日本語能力を伸ばすことにつながるのではないかと考えた。

3. 研究の経過

外国人児童の学習意欲向上のためのICT機器の導入等

①時期	②取り組み内容	③評価のための記録
9月13日	日本語教室の国語教科書購入 国語科の教科指導開始	観察記録・写真
9月17日	i pad 導入 i pad を活用した指導開始	観察記録・写真
9月30日	各種言葉のカードを購入	観察記録・写真
10月8日	ポケトーク購入 指導にポケトークを活用	観察記録・写真
10月15日	滋賀大学岸本教授による参観授業	指導助言
1月20日	ICTを活用した指導に関するアンケート調査	アンケート調査(児童)
2月25日	本校日本語指導教室実践発表	参加者コメント

4. 代表的な実践

・タブレットを活用した指導

①ひらがな、カタカナの練習アプリを利用した学習

外国人児童にとって、日本語を学ぶ上での初期指導として、ひらがなやカタカナを習得することが重要となってくる。当初はプリントに何度も書き取りの反復練習などを行うことで習得のための手立てとしていたが、意欲が持続しない児童も目立った。そのような児童を中心にアプリの学習の機会を与えるようにした。その結果、自分のペースで文字の読み方や、文字の形、書き方を同時に学習することが可能となり、一文字一文字を確実に覚える児童が増え始めた。文字を覚えたことで、短い言葉の書き取りや文章の読み取りに進むことができ、

児童の意欲が高まったように感じた。

②漢字アプリを利用した書き取り学習

漢字の習得は、外国人児童の日本語能力を発展させるために必要不可欠な内容である。しかし、外国人児童にとって漢字を覚えることは、ひらがなやカタカナを覚えることよりも格段に難易度が高く、「どうせ覚えられないから…」と漢字を見ただけであきらめてしまう児童も多い。ひらがなやカタカナをやっとのことで覚えた外国人児童にとって、漢字の形や書き順を覚えることはさらに敷居の高いものであり、ひらがなやカタカナの文字指導と同様に意欲を持続できない児童が目立った。そこで、漢字の書き取りアプリを活用して、共同的な学びの場を設けた。右は4年生の児童の学習の様子である。通常漢字の学習は、書き順や読み方の指導の後、プリントで反復練習を行うようにしていた。ここでは、タブレットに表示された漢字の問題に対して、複数の児童で取り組むようにした。その結果、一人ではなかなか課題に取り組めない児童も、進んで漢字の表から問題の漢字を見つけ出して、書き取りをする姿が見られた。また、わかる児童がわからない児童に書き方を教える姿も見られ、これまで見られなかった学び合う学習へと高めることができた。



③インターネットを活用した九九の学習

第二学年の児童にとって、算数科の九九を覚えることは、今後の算数科の学習を進める上で必須な要素の一つである。しかし、外国人児童にとってその九九を覚えることも困難な内容の一つである。日本語を十分に扱うことができないために、九九を覚えきれずに第3学年に上がってしまう児童が少なくなく、第3学年以降の算数科の学習につまずいてしまう児童が多い。そこで、九九に少しでも興味を持って取り組めるようにICT機器を取り入れ、インターネットの動画を活用して学習ができるようにした。この動画では、子どもが親しみの持てるキャラクターが歌で九九を歌ってくれる。リズムによって、楽しく九九を学習できるようになり、学習の最初には、「九九の動画みたい！」という声があがるようになり、九九の学習にも意欲的に取り組める児童が増えた。九九のテストの際には、歌を歌いながら九九を言うようになり、確実に九九を覚えていく児童の姿が見られた。



④ 「ロイロノート」による発展的な学習

ある程度ひらがなや漢字を習得した児童には、国語科の単元を用いて教科指導を進めている。しかしながら、まだ語彙力に乏しい外国人児童にとっては、教科書の文章を読んで内容を理解することは困難なことである。そこで、タブレットを使って視覚支援をしながら、教科書の読み取り指導ができないかと考えた。そのために、滋賀大学の岸本教授から紹介していただいたのが「ロイロノート」というアプリである。以下の画面をテレビ画面に表示し、写真や動画を取り入れたり、絵を描いたりしながら視覚的な情報を活用する。



ロイロノートを活用したことで、これまでの児童一人ひとりが個人の課題に取り組むという学習スタイルが一変した。日本語能力が低位の児童でも、インターネットで調べてみたり、絵を描いてみたりしながら、みんなで情報を共有することで、教科書に書いてある文章を少しずつ理解していく姿が見られた。さらに、学習への意欲も上がり、自然と手を上げて発言する姿や児童同士で教え合いをする姿など、積極的に学習に取り組む様子が見られた。みんなでひとつの課題に取り組むというような共同的な学び合いの場が生まれたのである。

このロイロノートにはデータを共有する機能ある。今後は、児童一人ひとりがタブレットを持ち、それぞれが読み取ってわかったことや考えたことを書き込んだものを作成させ、それらを共有するなど、ロイロノートをさらに発展的に活用していきたいと考えている。

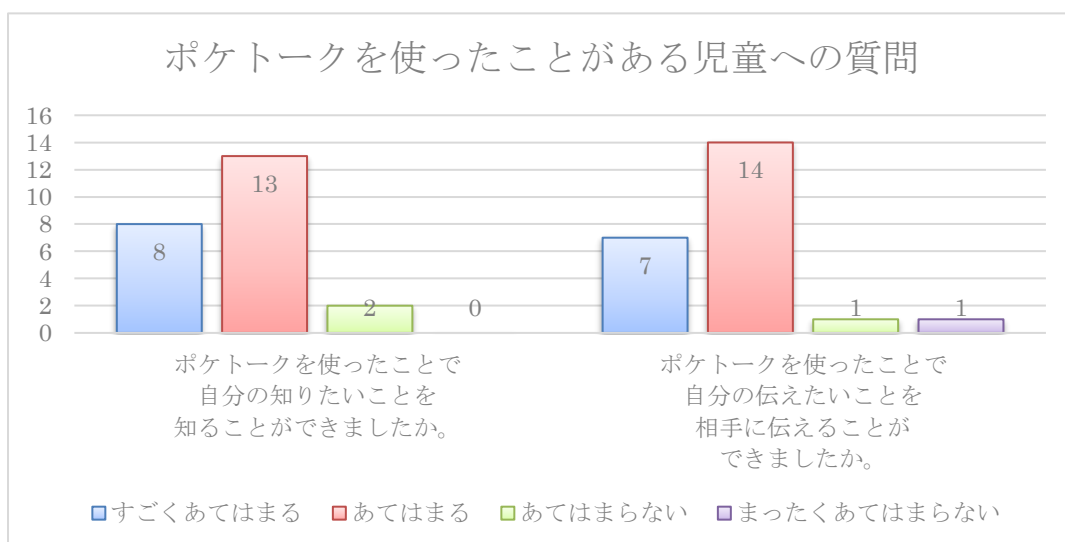
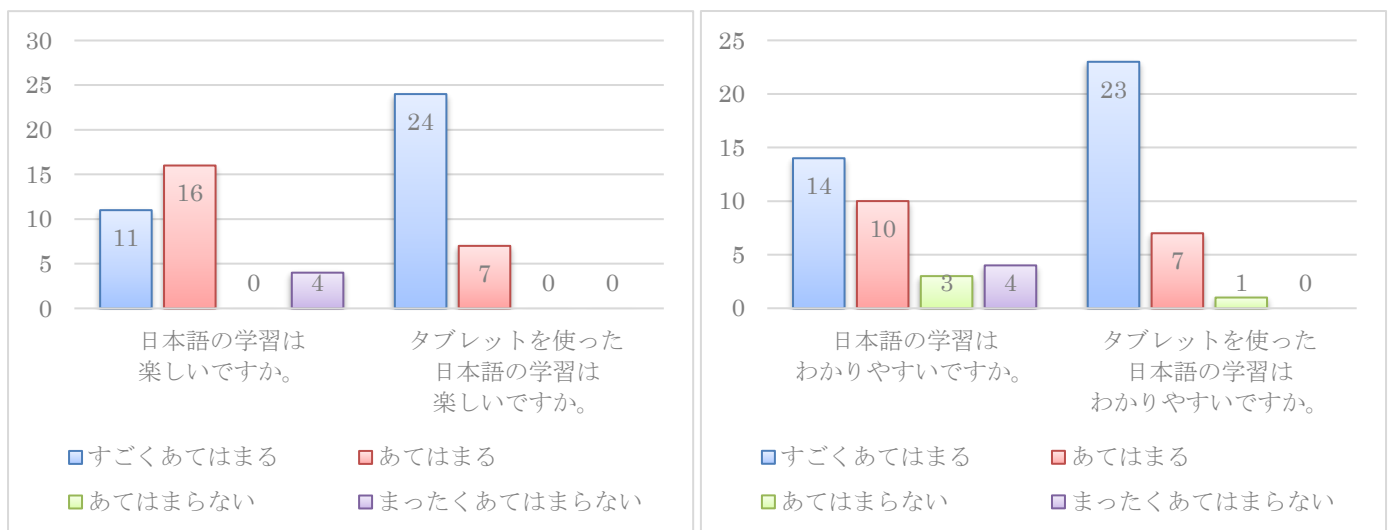
・ポケトーク (翻訳機) の活用

外国人児童のほとんどの児童には、家庭での家族との会話などでポルトガル語やスペイン語といった母語を話す素地がある。日本語で伝えられないことも、母語でなら伝えることができる。そこに着目し、ポケトークを学習の場に取り入れた。ポケトークを使うことで、指導者が伝えたいこと児童へ伝えるということだけでなく、児童が自らの母語を使って日本語の言葉の意味や文章を調べることもできた。自分たちの母語を生かして自ら学ぶことが、児童の自信にもつながり、何かを伝えたいときなどは、進んでポケトークを使ってコミュニケーションを取る児童が増えた。



5. 研究の成果

ICT機器を学習に活用することで、外国人児童の学習に対する意欲の向上につながるのではないかという考えで、これまで実践を進めてきた。その結果の確認のために、2月初旬に外国人児童を対象にしたアンケートを実施した。以下はその結果である。



I C T機器を使うことで児童の学習に対する意欲の向上が見られた。さらに、日本語学習の内容理解に関しても、わかりやすいと思える児童が多いようである。実際、年度当初と比べると、母語ばかり使って話をしてきた児童が進んで日本語を話すようになってきている。また、当初、教科書の文章を読む課題に対して気が載らない様子の児童が多かったが、だんだんと読めるようになっていくことから、自分から「読みたい!」という児童も見られるようになってきた。今回の取組で、外国人児童の学習意欲に関して大きく変容が見られた。さらに日本語能力の向上に関しては少しづつ力を付けていっている様子が見られた。

6. 今後の課題・展望

外国人児童の学校生活では、学習面での課題だけではなく、生徒指導上の課題もある。自分の思いをうまく伝えられないために、人間関係をうまく育めないことや、日本での生活にまだまだ馴染めないといったことから、トラブルにつながるがよく見られる。今後は、そのような言葉の不自由さから来る生活面での問題にも目を向けて、日本語の学習を通して指導していかなければならない。

今回の実践を通して、本校の日本語教室での外国人児童の学び方は大きく変化した。これまでの日本語を教えて込まれるという形式から、自ら学びに向っていけるというように児童の意識も変わりつつある。しかしながら、言語の学習というのはまだまだインプットすることの比率が多い。今後は、インプットしたことを児童自らがアウトプットしていけるようにしていきたい。学んだことを生かす喜びを児童が感じることでさらに日本語を学習することに意欲を持ち、今後日本でも活躍していける人材になってほしい。

7. おわりに

昨年5月31日の助成金贈呈式後のスタートアップセミナーでは、大学教授の方々から多くの助言をいただいた、外国人児童の多さからトラブルが多いなど本校の課題を述べると、助言の中に「さまざまな問題があるみたいだから、いろいろやってみて少しでも変容があれば、それが成果だよ。」というものがあつた。今年度の研究でも、当初の研究主題と沿わない部分もあつたが、確実に児童の学習態度に変容はあつた。その点についてはやってきて良かったと感じている。助成金を提供していただいたパナソニック様ならびに助言いただいた各大学教授様および、各方面からご支援いただいた滋賀大学教育学部教授岸本実様には感謝申し上げます。ありがとうございました。